

## 『正訳源氏物語』と教室における現代語訳

— 敬語の訳をめぐる —

一之瀬 朗

このたび刊行された、中野幸一先生の『正訳源氏物語』全十冊（以下『正訳』と表記する）の最大の特徴は、

語りの姿勢、つまり相手に語りかける場合、私たちは、「……だ」「……である」「……であった」などという、いわゆる「である調」で話すでしょうか。相手（物語の場合は聞き手あるいは読者）を意識した場合、ごく自然に用いられる日本語は、「……です」とか「……ます」とかの、いわゆる「ですます調」ではないでしょうか。

と、同書『源氏物語』の全訳に当たって」にあるとおり、物語というものの特質に配慮した訳し方にあるといえよう。

その具象である「ですます調」は、物語の「語りの姿勢」における適切な表現体として用いられているわけなので、学校文法で言うところの丁寧語という概念で単純に規定できないものであるけれども、「相手（物語の場合は聞き手あるいは読者）を意識し」

て用いる日本語という性格からしてみれば、丁寧語、すなわち前者への敬語と呼んで齟齬のないものだろう。

このように、訳出に際しては現代語の敬語表現に特段の意識が払われた本書であるが、それは『源氏物語』の本文に対しても同じである。

『正訳』第一冊9ページ「桐壺」の一節を見てみよう。（傍線は稿者による。以下同様。）

（本文） かかるをりにも、あるまじき恥もこそと、心づかひして、皇子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

（訳文） このような場合にも、とんでもない恥を受けてはと用心されて、若宮は宮中におとどめ申し上げて、更衣だけがそつとご退出なさいます。

「心づかひして」を「用心されて」と訳しているが、これは、学校文法的には「連用形の中止法」（稿者は「一括敬語法」と教えて

いる)などと呼称され、尊敬語が付されていなくても、下に位置する「たまふ」によって、「心づかひして」も同様に敬意を含有すると見做される言語事象である。中野先生はこれを「統括敬語」と名付けられたそうだが、『正訳』にあつては、多くの場合、右のように訳文に反映されていることには注目させられる。

しかし、次(『正訳』第一冊244ページ「若紫」)のごとく、『統括敬語』が訳出されないものがあることには、なお留意すべきではないか。

(本文) すこし立ち出でつゝ見たしたまへば、高き所にて、こ  
こかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる。

(訳文) 少し外に出であたりをご覧になりますと、高い所ですの  
で、あちらこちらにいくつもの僧坊が隠れもなく見下ろ  
されます。

こうした画一的でない処置は、敬語の煩瑣な使用を避け、より「美しく正しい日本語」(前掲「源氏物語」の全訳に当たつて)となるよう企図されたものであることを察しておきたい。

さて稿者なども、授業中に自分が教えた現代語訳の書いてあるノートを生徒が持つてきて、「先生、これつてどういう意味ですか?」と聞かれることが間々ある。その場合、聞きなれない、もつといえは現代語として違和感のある表現が訳文中に存在することが多く、それが敬語表現であることも実に多いのだが、この点に關する『正訳』の配慮は引き続き顕著で、同「若紫」254ページにおいては、

(本文) さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似

たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ  
落つる。

(訳文) それといひますのも、限りなくお慕い申し上げているお  
方(藤壺)に、まことによく似ておいでなのに、おのず  
と目がとまつたのだとお思い至りますと、君はわけもな  
く涙がこぼれ落ちるのでした。

と、「似たてまつれる」が「似ておいで」と訳されている。  
「似申し上げている」もしくは「お似申して」等とは訳さず、「似  
ておいで」という「正しい日本語」に変換したこの英断を、敬語  
の種類が違ふ、あるいは敬意の対象が違つてくるとの理由で否定  
することはたやすい。

しかし、稿者以外にも多くの教師が知っているであろう、わか  
りにくい敬語の訳が生徒の学習に混乱をもたらしているという実  
態に鑑みれば、「似申し上げている」のごとき、中等教育におけ  
る古文科学習の中だけで使つてよい、使わざるを得ないような日  
本語の存在を是とする考え方を含め、現代語訳のあり方について  
本格的に議論し、学校内の試験、延いては大学入試の実状や採点  
の基準にも言及・提言していく時期に、我々はそろそろ差しか  
かっているのではないかと思うのである。

(早稲田中学校・高等学校)